異年齢保育と子どもの発達

年齢構成条件が異なる保育における相互交渉パターンの比較から

2009(平成 21)年 1 月 15 日

修士論文発表会用　要約版（一部修正）

北海道大学大学院教育学研究科

乳幼児発達論研究グループ

吉　田　　行　男

指導教員　陳　　省　仁　教授

－　目　次　－

はじめに ……3
第１章　問題の所在と研究の目的 ……4
第１節　問題の所在 ……4
１．現代の子どもの育ちの危機とその背景 ……4
２．年齢別保育の問題点 ……4
３．異年齢保育の歴史 ……5
（１）初期
（２）戦後
第２節　研究の目的 ……5
第２章　研究の方法 ……6
第１節　先行研究とその問題点 ……6
第２節　本研究の方法 ……6
第３章　年齢構成条件が異なる保育における相互交渉パターンの比較 ……6
第１節　観察対象園の概要 ……6
１．年齢別保育を主とした保育園 ……6
２．異年齢保育を主とした保育園 ……7
第２節　観察と比較の方法 ……8
１．観察方法と場面 ……8
２．比較の方法 ……8
第３節　観察の結果 ……8
１．構造化された保育場面の比較 ……8
（１）生活場面の比較
（２）移動場面の比較
（３）設定保育場面の比較
２．構造化されていない保育場面の比較 ……9
・　自由遊び場面の比較
第４節　観察結果の分析 ……9
第５節　考察 ……9

第４章　異年齢保育の実態調査 …… 9
第１節　調査の目的 …… 9
第２節　調査の方法 …… 10
第３節　調査の結果と分析 …… 10
１．異年齢保育に関する取り組みの有無 …… 10
２．異年齢保育に関する取り組みの動機 …… 10
３．子どもの成長・発達についての良い効果 …… 10
４．子どもの成長・発達についての好ましくない結果 …… 10
第５章　全体考察と結論 …… 11
第１節　全体考察 …… 11
１．年齢別保育と異年齢保育の比較 …… 11
（１）年齢別保育の特徴
（２）異年齢保育の特徴
（３）両者の比較
２．異年齢保育と子どもの発達について …… 12
（１）向社会性について
（２）愛情関係について
（３）受容性について
（４）自立心について
３．異年齢保育の取り組みの条件と課題 …… 18
第２節　結論 …… 19
１．異年齢保育と子どもの発達 …… 19
２．年齢別保育と「競争の原理」 …… 19
（１）年齢別保育の根拠とその背景
（２）年齢別保育の本質とエートス
３．異年齢保育と「共生の原理」及び今日的意義 …… 23
（１）異年齢保育と「共生の原理」
（２）異年齢保育の今日的意義
今後の課題 …… 26
謝辞 …… 27
用語解説、引用・参考文献 …… 28

〔資料〕 …… 1～23

はじめに

筆者は、近年の子育て環境の変化と、子どもの育ちの危機的と言ってもよい状況に対する対応策の一つとして、保育現場において、10 数年前より、異年齢保育の実践に携わってきた。その過程で、想像以上の子どもたちの豊かな育ち合いの姿に接し、それまでの年齢別保育一辺倒の保育に比べて、異年齢保育は、子どもの心の成長発達にとって、様々な良い効果があることを実感してきた。

最近では異年齢保育についての関心も高まり、それを実践する保育園や幼稚園が増え、実践報告を中心とした研究もなされている。しかし、年齢別（のみ）の保育と比べて、異年齢保育が具体的になぜ良いのかについての実証的な比較研究は、皆無と言ってよい。

本研究では、年齢別保育と異年齢保育のそれぞれにおける、子どもたちの間や子どもと保育士との間の相互交渉パターンや、それぞれのグループで形成されている人間関係の違いを具体的に明らかにし、これからの乳幼児保育を考える材料を提示したいと思う。

そのための方法として、年齢別保育と異年齢保育双方の子どもの日常の行動観察と、アンケートによる実態調査の二つの方法を用いた。前者の観察結果については相互交渉のカテゴリーの生起頻度についての数量化を試みた。その数値は、条件をきちんとそろえることの困難さから、絶対的なものではないことをあらかじめお断りしたい。その数値については、研究の目的に沿ってそれぞれの顕著な相互交渉パターンの特徴や、全体的な傾向をおおまかに把握するために用いることにした。

結論では、年齢別保育と異年齢保育それぞれにおける仮説としての基礎原理、及び異年齢保育の提起する今日的意義についても言及する。

キーワード

異年齢保育	年齢別保育	多様性	向社会性	愛情関係
受容性	自立心	エートス	競争の原理	共生の原理

第１章　問題の所在と研究の目的

第１節　問題の所在

１　現代の子どもの育ちの危機とその背景

かつての多人数のきょうだい間の育ち合いや、乳幼児を含めた地域の異年齢子ども集団における多様で重層的な人間関係と相互交渉は、子どもの自立や思いやりなどの向社会性をはじめ、その成長・発達に大きな役割を果たしてきたと考えられる。しかし、近年の核家族・少子社会、地域の人間関係の希薄化、遊びの時間・空間の減少、さらには、テレビゲームなど、他者との関わりを必要としない遊びの質の変化などに伴い、かつての地域の異年齢子ども集団は消失してしまったと言っても過言ではない。

他方、学校における年齢別学級だけでなく、幼稚園や保育園などの集団保育（「保育」の語は「教育」の意も含むので、以下「保育」の語で統一する）の現場においても、長年、年齢別保育が主流であったと言える。

これらの結果が、今日の子ども・青年の全人格的発達の阻害という危機的状況（自己中心性、共感能力の欠如、耐性がなくすぐキレル等）や教育･社会問題（いじめ、自殺、ひきこもり、凶悪犯罪の低年齢化等）をひきおこしている一因となっているのではないかと思われる。また、近年の若者、ひいては日本社会全体の養育性形成不全の問題とも無関係ではないであろう（陳 2007）。

２　年齢別保育の問題点

保育辞典等では「年齢別保育」の根拠について「発達段階が近い子どもたちが集まることも影響し、発達課題に対応した保育実践を展開したり、集団を形成しやすい利点をもっている。」（加藤 2006）としたり、「年齢が等質であるということから発達的に等質であるとみなされ、保育を行ううえで効果的であるとされてきた。」と述る。しかし、４月入園の時点での年齢でクラスを構成するために、４月生まれの子どもと翌年の３月生まれの子どもとでは、約１歳の差があることになり、また生まれ月が同じであったとしても、生活経験や発達的な違い、興味･関心は子どもによって多様である（田代 2004）。

このような年齢別保育の根拠は、学校教育における年齢別の学級編成と同じ考え方であり、乳幼児保育の実情に即したものとはいい難い。それどころか、歴年齢の画一性にこだわることによって、前述のように、激変する今日の子育て環境の中では、乳幼児の思いやりなどの向社会性や受容性や自立心などの心の発達が阻害される可能性さえ考えられる。

３　わが国における異年齢保育の歴史

（１）　初期

1890 年頃（明治中期）から、アメリカで起きた自由保育思潮の影響下、1909（明治42）年に、物・時間・場所を決めず、固定した組を廃して、幼児の自発的活動を重んずる保育に転換した幼稚園があった（岡山県師範学校附属幼稚園）。

次に、1912（大正１年）に、初めてわが国にモンテッソーリ法が紹介された。この教育法は、子どもを観察し、実証した結果にもとづく、個々の子どもの発達を重視する自由保育による新しい教育法として、当時の保育関係者の注目を集め、少なからぬ影響を与えた。その後、大きな広がりを見せるには至らなかったが、異年齢保育についても問題を提起し続けてきたと言える。

（２）　戦後

わが国において、異年齢保育そのものに関する議論が始まったのは、1970 年代以降のことである。すなわち、過疎地での園児の減少や、都市部での低年齢児の保育需要の増大によって、園児と保育者の人数や空間などの条件的な制約の下、年齢別クラス編成ができず、やむを得ず混合保育を実施する園が多く出現するようになってきた。これは宮里（2001）のいう「条件的異年齢保育」である。

当初、保育現場では、この現実に戸惑いながら、今までの年齢別保育では見られなかった異年齢間の豊かな相互交渉の姿に接するとともに、ちょうど同時期に始められた障がい児保育にも、年齢・発達にこだわらない、異年齢保育が有用であることに気付き、異年齢保育の意義について目を開かれ、実践が広がっていった。

このような実践の広がりを踏まえ、1990 年の保育所保育指針では、３歳以上児の領域において初めて異年齢児間の関わりを加え、続いて 2000 年の改定を経て、2009 年施行の新指針では、不十分ながら「保育の内容」の中に、「異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ。」と盛り込み、その「解説」でも異年齢保育を積極的に促すものとなっている。

第２節　研究の目的

以上、を踏まえて、本研究では、次のことを明らかにしたい。

まず、年齢別保育と異年齢保育を対比させながら、それぞれの保育の中で、子どもたちは、保育士や子ども同士の間でどのような相互交渉を展開し、どのような人間関係を築き、どのように成長・発達しているのかを、観察及び実態調査を通して、具体的に明らかにする。

その結果、年齢別保育における問題点と、異年齢保育が子どもの全人格的発達にどのような効果を与えているのかを（問題点を含めて）考察したい。

第２章　研究の方法

第１節　先行研究とその問題点

前述した異年齢保育の実践の積み重ねの上に、1980 年代以降、実践報告や異年齢保育のみの観察をもとにした研究が発表されるようになった。しかし、これまでの研究では、必ずしも明らかになっていない重要なポイントとして次の２点がある。

①　年齢別保育についての実証的検証が不足していること。(年齢別保育の問題点について推論や一般的な見解の紹介・議論は少数ながらある。例えば、渡邊 2006)。

②　実態調査での研究では、アンケートの方式が、カテゴリー分けされた選択肢を選ぶ方式のものが多く、現場の生の姿や生の声が反映しづらいものとなっていること。

第２節　本研究の方法

上記を踏まえ、本研究においては、次の方法を用いることにする。

まず、第一に年齢別保育を主とした保育園の子どもたちの相互交渉と異年齢保育を主とした保育園の子どもたちの相互交渉を別々に観察し、それぞれに特徴的な相互交渉のパターンを抽出し、比較する。

第二に最近の保育園（都市部及び郡部を含む）における異年齢保育の取り組みの広がりや、子どもの発達に対する効果・課題等についてのアンケートによる実態調査をおこなう。実践現場の生の姿、生の声を反映させるため、回答は記述式を基本とする。

第３章 年齢構成条件が異なる保育における相互交渉パターンの比較

第１節　観察対象園の概要

１　年齢別保育を主とした保育園

年齢別保育を主とした保育園として、A保育園とB保育園の協力を得た。いずれもＳ市認可保育園である。A 及び B 保育園の概要は表１・２（資料 P.2～3）の通りである。内容は、各園の「しおり」と聞き取りによる。観察対象は２歳児以上である（年齢表示は、年度初めの４月１日現在による)。

２　異年齢保育を主とした保育園

異年齢保育を主とした保育園として、Ｓ市認可保育園であるＣ保育園を観察対象園とした。

Ｃ保育園では、10 数年前より異年齢保育の試みを始めた。2002 年４月からは、毎日の生活場面（朝の会、昼食、午睡、おやつ）でも２歳高月齢児（年間を通して乳児から幼児に移行、きょうだいは、同じファミリーに属する）を含む異年齢小グループ（以下「ファミリー」と呼ぶ）で過ごす異年齢保育に取り組んでいる。

幼児のファミリーの数は、2007 年度からは６ファミリーである。人数は、時期によって異なるが１ファミリー12~18 人程度である。

その概要は、表３（資料 P.4）の通りである。観察対象は２歳高月齢児以上である（年齢表示は、年度初めの４月１日現在による）。

午前中の設定保育の内容とその回数は､時期によって異なるが､年間を通して見ると、週のうち、異年齢選択活動（「のびのび」と呼ぶ、現在、運動、体験、作る、リズムの４種類、その日、子どもが自由に選ぶ）が２回ほど、ファミリーの活動が１～２回、クラス活動が１～２回（行事が近いと多くなる）となっている。

[Ｃ保育園の異年齢保育実施の条件と配慮]

現在、C 保育園が取り組んでいる異年齢保育の実施条件・配慮等を整理すると、以下の通りである。

① 毎日の生活（朝の会、昼食、午睡、おやつ）を共に過ごすこと。

② ファミリーの家庭的な雰囲気を大切にする（人数・保育室の環境等）こと。

③ 幼児のファミリーの中に２歳（高月齢）児が入っていること（きょうだいは、同じファミリーに属する)。

④ 設定保育では、子どもが自分の興味・関心に基づいて主体的に遊びを選べるよう、異年齢の選択活動（のびのび）を設けていること。

⑤ 同年齢クラスの遊びも保障すること。

⑥ 子どもの人格を尊重し、自発性を大切にすること。決して異年齢の関わりを強制することはしないこと（昼食の座席などの配慮や自然な促しは大切)。

⑦ 異年齢で遊べる環境設定や遊びの提供、そのための研究・実践が常になされていること。

第２節　観察と比較の方法

１　観察方法と場面

本研究では、年齢別保育と異年齢保育のそれぞれの相互交渉をビデオによる自然行動観察法で観察（筆者１名）し、それぞれの特徴を比較・検討する。

そこでまず、構造化された場面として①生活場面、②移動場面、③設定保育場面の順で観察し、次に構造化されていない場面としての④自由遊び場面を観察した。

観察対象場面とその内容、観察時間、比較対象場面数及び観察日を表４（資料 P.5）に整理する。

２　比較の方法

上記の観察における相互交渉パターンの分類は、表５（資料 P.6）の通りである。

観察の記録に当っては、それぞれの場面における全体状況（遊びなどのグループ数、保育士の頻繁な声かけ、昼食の会話等も含める）と個別の相互交渉のエピソードを記録する。そのエピソードで生起した相互交渉パターンの種類を、表５の略号で表す。また、その相互交渉が一方的なものと、双方向のものとを区別して見る必要があるので、その方向性と頻度を表６（資料 P.7）の記号・数値で表わす。

相互交渉の頻度を実数ではなく、レベルと評定値を用いて表すのは、次の理由による。①全体状況を実数で数えるのは困難であること。②比較場面の観察時間・人数等の条件が、同じではないこと。③自由遊びの使用場所が園により異なり、２～３室を使用している場合は、全てのエピソードを拾うことは困難であることによる。従って、レベルで評価するのがより妥当であると考える。

ただし、これら３点の条件の統一性の困難さという問題は、以下によって表わされる数値が、絶対的なものではないことを意味する。研究の目的に沿って、相互交渉パターンの顕著な特徴や全体的な傾向を把握するという趣旨で用いたい。

第３節　観察の結果

観察結果を、前節の方法に従って、記録・評価（参考例、資料 P.8～12）し、それを集計したものを、以下の目次に沿って場面ごとのグラフ、一覧表、総括表で比較する（表７～15　本資料では表 15　資料 P.13 のみ掲載する）。

なお、基礎データとなる観察ビデオの視聴、記録、評価については、複数の協力者と共同で行った。

１．構造化された保育場面の比較

（１）生活場面の比較

（２）移動場面の比較

（３）設定保育場面の比較

２．構造化されていない保育場面の比較

・　自由遊び場面の比較

３．各場面における比較一覧と総括表

第４節　観察結果の分析

表 15 は、主論文の資料篇にあるエピソードの記録・評価に基づいて作成されたものである。前述したように、この数値は絶対的なものとは、言い難いが、これによって年齢別保育と異年齢保育における、それぞれの場面及び全体の相互交渉パターンの特徴とおおよその頻度が示された。

ここでは、総括表（表 15）に基づいて、年齢別保育と異年齢保育における重要と思われる相互交渉パターンの特徴と頻度を、比較し、分析する。

第５節　考察

考察に入るにあたって、まず強調しておきたいことがある。それは、特に年齢別保育における観察結果についてである。年齢別保育の特徴的な相互交渉パターンとして、競争的なものや攻撃的なものが多く見られたり、異なる年齢の間での相互交渉がほとんど見られない等は、Ｃ保育園その他の異年齢保育に取り組んでいる園の以前の姿（証言は後程紹介する）でもある。決して特異な例でないことを前提に本論を進める。

（以下省略。P.12 以降の第５章「全体考察」で述べる。）

第４章　異年齢保育の実態調査

第１節　調査の目的

以上の観察と考察の結果の妥当性がどれ程保証されているかについて、検証される必要があろう。そこで、以下の通り、多数の保育園の協力を得て、アンケートによる実態調査を行った。

調査項目は、１３項目あるが、本研究では、直接関係のある①異年齢保育の取り組みの有無、②取り組んだ動機、③子どもの成長・発達についての良い効果、④好ましくない結果を中心に報告する。

第２節　調査の方法

（１）　対象

Ｓ市内の公・私立認可保育園 187 園及びＳ市周辺Ｉ支庁管内７市町村内の公・私立認可保育園 54 園の計 241 園を対象とした。

（２）　対象時期

2007（平成 19）年７月１日（グループ構成のみ４月１日）現在とした。

（３）　方法

調査方法は記名式で記述を主とするアンケート調査によった。調査票（回答用紙と一体のもの）を郵送し、返送用封筒を用いて、郵送･一部ＦＡＸにて回収した。

一部不明の点は、電話による聞き取り調査をした。

（４）　集計

回収 124 園、回収率 51.5%であったが、無効回答７園を除く 117 園（48.5%）の有効回答を分析対象とした。統計処理は Excel を用いた。記述式回答の資料は、可能な限り原文によったが､重複した内容のものや具体事例は支障のない範囲で省略･簡潔化した（件数にはカウントした)。

第３節　調査の結果と分析

１　異年齢保育に関する取り組みの有無（表１６　資料 P.14）

調査対象 241 園中、有効回答は 117 園（48.5%）であった。そのうち、異年齢保育に取り組んでいる保育園は、89 園（有効回答の 76.1%）あった。

調査対象 241 園中の､89 園､すなわち全体の 36.9%以上の保育園が､何らかの形態､･内容で異年齢保育に取り組んでいることが分かった。

２　異年齢保育に関する取り組みの動機（表１７　資料 P.15～16）

３　子どもの成長・発達についての良い効果（表１８　資料 P.17～20）

４　子どもの成長･発達についての好ましくない結果（表１９　資料 P.21）

第５章　全体考察と結論

さて、第３章の観察結果及び第４章の実態調査によって、年齢別保育と異年齢保育それぞれの相互交渉パターンの特徴とその相違が明らかとなった。

第１節の全体考察では、それらを整理確認すると同時に、異年齢保育が、子どもの発達にどのような影響を与えているかを考察し、その取り組みの条件と課題について述べる。また、第２節の結論では、異年齢保育が、子どもにどのような発達を促しているかの結論を確認し、本論の根底にある年齢別保育の抱えている問題点を明らかにするとともに、異年齢保育の本質と意義、さらには、社会全体に対する問題提起について論ずる。

第１節　全体考察

１　年齢別保育と異年齢保育の比較

（１）　年齢別保育の特徴

観察の分析・考察の結果、年齢別保育における相互交渉パターンの特徴として、次の５点が明らかになった。

① 保育士から子どもへの一方向の教育的･養護的関わりが多い。

② 同じ年齢の子どもの間の協調的相互交渉のみが多い。

③ 同じ年齢の子どもの間では、競争的関係が見られる。

④ 異なった年齢の子どもの間での相互交渉は、ほとんど見られない。

⑤ 同じ年齢の子どもの間でも、異なった年齢の子どもの間でも、攻撃的な相互交渉が見られる。

（２）　異年齢保育の特徴

異年齢保育における相互交渉パターンの特徴として、次の４点が明らかになった。

① 同じ年齢の子どもの間においても、異なる年齢の子どもの間においても相互交渉が見られるが､その頻度は､年齢別保育のそれに比べて異年齢保育が圧倒的に多い。

② 異なる年齢の間では、協調的･養護的相互交渉、愛着行動を中心に、非常に多く見られ、また、教育的な相互交渉も多い。

③ 同じ年齢の子どもの間の協調的相互交渉の中には、低年齢児のお世話を、同じ年齢の子どもたちが協力して行っているものも含まれる。

④ 保育士と子どもとの相互交渉は、年齢別保育に比べて少ないが、年上の子どもたちと保育士とが、意図せず自然に、低年齢児への教育的･養護的相互交渉と愛着行動を共同で担っていると見られる。

（３）　両者の比較

上記（１）（２）を基にしながら、第３章第５節で考察した、３つの視点からの比較を、もう一度確認すると次のようになる。

a　相互交渉のカテゴリーの多様性及び重層的人間関係の形成について

異年齢保育においては、カテゴリーの多様性と重層的な人間関係が認められた。それに対して、年齢別保育においては、相互交渉の多様性は極めて乏しく、人間関係においても単調な関係しか認められなかった（エピソード１、資料 P.21）。

b　相互交渉における向社会性について

異年齢保育においては、異なる年齢の子どもの間の養護的･愛着行動･協調的相互交渉を中心に向社会的行動が豊かで、多く見られた。それに対して、年令別保育では、同じ年齢の間の協調的相互交渉（たむろしているものや、単に同調しているものも含めて）は多く見られたが、異なる年齢の子どもの間での相互交渉は、例外を除いてほとんど見られず、向社会性も非常に乏しいと言わざるを得ない（エピソード２、資料 P.21）。

c　相互交渉における受容性について

異年齢保育においては、同じ年齢の子どもの間でも多いが、特に異なる年齢の子どもの間での協調的相互交渉が圧倒的に多く、年上の子が遊びを壊す可能性のある低年齢児をも受け容れて、遊びを教えたり、ルールを工夫して、一緒に遊んでおり、受容性が極めて高い。それに対して、年令別保育では、同じ年齢の子どもの間では、競争的な関係が見られると同時に、同じ年齢の子どもの間でも、また異なった子どもの間でも攻撃的相互交渉が見られた。受容性に乏しいだけでなく、排他的な傾向を有していると見られる（エピソード３、資料 P.23）。

２　異年齢保育と子どもの発達について

さて、以上で観察結果の考察を整理･確認した。次に、実態調査の結果をも踏まえて。本論の中心テーマである、異年齢保育が子どもの成長発達にどのような良い効果を与えているかについて、次の４点について考察したい。第一に、向社会性について、第二に、愛情関係について、第三に、受容性について、第四に、自立心についてである。順次エピソードを紹介しながら述べる。

（１）　向社会性について

①　観察結果から

年上の子が年下の子に対して思いやりや優しさを発揮している。特に養護的な関わりや、愛着行動や協調的関わりが非常に多く見られる。協調性は、下の子たちをお世

話したり、仲良く遊んだりするために、年上の子たちが協力し合っている姿も含まれる。

また、トラブルを解決し、上手く関係を維持改善するコミュニケーションや行動も見られる。そのエピソードを次に２つあげる。

［エピソード4］ 異年齢：生活場面　朝の会（2～5歳児）

（朝の会が始まる前に、各自ホールにある棚から自分のカバンを持ってきて、中からおしぼりとノートを出して、所定のケースに入れる。）

① ５歳児のK君が自主的に、同じファミリーのメンバーのノートを集め、出していない2歳児のL君に声を掛ける。集まったノートを年齢順にケースに入れる。

５歳児のMちゃんが2歳児のNちゃんの手をつないで、一緒にカバンを持ってきて、Nちゃんが出したノートをケースに入れる。

２歳児のNちゃんがこぼした牛乳（2歳児のみ）を、5歳児の０ちゃんが拭いてあげる。

② 保育士の絵本の読み聞かせの間、Mちゃん（5）と ０ ちゃん（5）は、Nちゃん（2）を真ん中に挟んで聞いている。終わるとMちゃんは、０ちゃんに話し掛け、頬と頬を寄せる。

③ 保育士から今日の予定・注意等についての話がある。

④ Mちゃん０ちゃんの2人がNちゃんの顔をのぞき込んで、Nちゃんの意見（のびのびの選択か？）を聞いている。

K君（５）は、ファミリーの年下の子たちにとって、憧れのお兄さん、いやそれ以上の尊敬するお父さんのような存在である。Mちゃん（５）と０ちゃん（５）も、Nちゃん（２）のお姉さん、お母さんのように協力してお世話している。決して自分たちの思い通りに事を進めるのではなく、Nちゃんの意見も尊重しながらお世話している。豊かな向社会的（養護、愛着、協調）相互交渉が見られる。

［エピソード5］ 異年齢：自由遊び場面（2～5歳児）

・ ４歳児のCちゃんが、2歳児のD君を膝に乗せて、2人でロンディーを作って遊んでいる。そこに5歳児のEちゃんが来て、D君の持っていたロンディーにぶつかり、それが落ちて壊れる。するとCちゃんは、Eちゃんに、「D、（落ちて壊れたことを）嫌だって言ってるよ」と言う。Eちゃんは、それを拾いながら「落ちたから拾ってあげたんだよ。壊れたからもう一回作ってみよう」と返して、Eちゃんは作り直し始める。D君は、それを見ている。

Cちゃん（４）は、D君（２）の気持ちを代弁して、年上のEちゃん（５）にやんわり抗議する（謝罪を求めているようにも取れる）。Eちゃんは、年上の優位さを持ち出して反撃することなく（多少プライドは維持しながら）、巧みなコミュニケーション

で、衝突を回避しつつ建設的に問題解決を図ったように思われる。

②　実態調査から

実態調査の表 18「子どもの成長・発達についての良い効果」（以下「良い効果」に略）についての回答の№1 の記述からも、上記エピソード 4 に該当する関わりの姿が、様々な言葉で言い表されており、最も多い回答であった。

（2）　愛情関係について

①　観察結果から

年下の子と年上の子の間に、強い愛情関係が育まれ、愛着行動が頻繁に見られた。

実態調査の表 18「良い効果」の№3「人間関係能力」の①にある深い「愛着・愛情関係」と№4 の「心の安定・癒し」ということに関連した次の２つのエピソードをあげる。

［エピソード6］ 異年齢：生活場面　昼食（2～5歳児）

（給食の当番はいない。できる子は全て自分で準備する。2歳児などまだできない子には、できないところを、年上の子が自主的に手伝っている。）

4歳児のUちゃんが突然泣く。同じテーブルの5歳児のHちゃんがUちゃんの手を取って話を聞いてあげる。Uちゃんは、泣きながら事情を話すと、気がすんで泣き止む。

・　同じテーブルで、もう1人準備がすんでいない、2歳児のI君のおしぼりがないことに気付き、「おしぼりは？」と聞く。首を横に振るI君の手を引き、おしぼりいれのケースの中を一緒に捜して見つける。流しで、おしぼりに水をつけ絞ってあげているHちゃんの後から、I君が抱きつく。その後、I君は、配膳台に行き、おかずを1人で皿に盛りつけてテーブルに戻る。Hちゃんは、それを見守る。

一人っ子のＨちゃん（５）は、おじいちゃん子である。日頃から昼食の時に同じテーブルに座る年下の子たちのことを気にかけ、優しくお世話している。Ｕちゃん（４）が、突然泣いた時、Ｈちゃんは自然に（さりげなく）Ｕちゃんの手を取った。それだけでＵちゃんの心は和らいだにちがいない。

Ｉ君（２）は、その心の中に満たされないものを抱えている子である。自分のことを思い、こんなに優しく温かくお世話してくれるＨちゃんの後ろ姿を見たＩ君は、そこに誰の後ろ姿を重ね合わせたであろうか。その時、Ｉ君は、思わずＨちゃんの後ろから、その腰に抱きついたのだった。

Ｈちゃんは、Ｉ君のできることは、自分でさせ、見守っていた。これこそ、Ｉ君を一個の人格として尊重する、真実の愛というべきではなかろうか。

［エピソード7］ 異年齢：自由遊び場面（2～5歳児）

④ 絵本コーナーでは、Eちゃん(5)が、絵本を読み聞かせている。Cちゃん(4)がD君(2)を膝に乗せて、一緒に絵本を見る。D君は、心地良さそうに落ち着いて見ている。Cちゃんは、近くで見ている3歳児のFちゃんに、「Fもおいで」と声を掛け、片方の膝を叩く。Fちゃんは、待っていたかのように、すぐにFちゃんの膝に座り、D君にちょっかいをかけながら、一緒に絵本を見る。途中Eちゃんは、穏やかな表情でFちゃんの背中に頬ずりをする。

Ｃちゃん（４）は、２人姉妹の下の子である。日頃から年下の子どもたちをかわいがっており、上のような愛着行動も多い。Ｄ君（２）と、Ｆちゃん（３）を両膝に乗せた後、ＣちゃんはＦちゃんの背中に頬ずりをした。その表情が何とも言えず穏やかな心地よさそうな面持ちであった。Ｃちゃんは下の子たちをかわいがることを通して、自分自身の思いを満たし、心の安定をはかり、あるいは心の傷を癒しているように見える。

② 実態調査から

実態調査の表 18「良い効果」の№4 の「心の安定・癒し」の①に、要旨次のような報告が複数ある。

同年齢の中では自信を持てなかったり、上手に関係をつくれないでいる子や、家庭環境などで精神的に不安定になっている子がいる。そのような子どもたちが、異年齢の関わりを通して心の安定を図り、傷ついた心を癒しているという事実が少なからずあるというものである。

上の二つのエピソードからも、見えない子どもの心の内が垣間見えるのである。

（３） 受容性について

① 観察結果から

同じ年齢の子も違う年齢の子も、協調して仲良く遊ぶことは、それ程簡単なことではない。それぞれの年齢の特徴的な行動（例えば、まだまだ聞き分けがない、器用さも足りないなど）特に年下の子が、年上の子の遊びを壊す可能性も多い。しかし、お互いに我慢したり、工夫したりして、仲良く遊んでいる。次のエピソードをあげる。

［エピソード8］ 異年齢：自由遊び場面（2～5歳児）

・　積木コーナーでは、初め5歳児のU君と4歳児のYちゃんが中心になって古代オリンピック競技場のようなものを協力して作っている（既に巾2m近く、高さ 80 cmくらいの山型半円形に近いもの）。後で加わった3歳児のA君は、その中の方に入り、自分も最初から一緒に作ったかのような得意気な顔で、慎重に積木を足してゆく。そこに少しずつ仲間が加わり、さらに大きくなってゆく。 20 分後に、5歳児の兄について、中に入って座っていた2歳児のBちゃんの足が積木に当たり、一気に総崩れとなる。崩れる音と同時にみんなから、「ワーッ」という声。初めから中心だった一人のYちゃん(4)は、不満げな顔でBちゃんに何かぶつぶつ言う。途中参加のA君(3)も同調するような表情をする。Bちゃんは呆然としている。しかし、U君(5)はじめ、他の上の子たちは誰も文句を言わず、怒らない。引き続き、向かい側の壁作りをしている。

たとえ、故意ではなくても、苦労して作り上げたものを一瞬の内に壊されたら、Ｙちゃんでなくても文句の一つも言いたくなる。この時のU君はじめ５歳児を中心とする年上の子たちの態度は、大人を唸らせる。これは、今までも同じようなことを数多く経験し、小さい子が、しかも間違ってしたことは、仕方のないことであって、非難すべきことではないという寛容の精神が育ってきたことの現れではなかろうか。

異年齢子ども集団の受容的な特徴がよく現れているように思われる。

Ｃ保育園では、2002 年に初めて２歳児を幼児ファミリーに入れたときに、特に積み木遊びで、しばしば年上の子の遊びを壊すというようなことが起きた。当初は、年上の子が下の子を諭して、「こっち来ないで」とか「あっちでやって」と言っていたが、次第に年下の子たちの「お兄ちゃん、お姉ちゃんたちと一緒にやりたい」という思いを上の子たちが受け止め、自然に様々の工夫をしだした。「Ａ君にもさせてあげようよ」「Ｂちゃんは小さいから壊してもしょうがないよ」と、年上の子たちに受容と寛容の心が育っていった。また、年下の子たちも上の子たちへの尊敬と信頼の思いを深めていった。

②実態調査から

実態調査の表 18 の「良い効果」の№2 と№3 に、年下の子たちが、年上の子たちの姿を見て尊敬し、刺激を受け、模倣し、学んでいること。そして信頼関係を深めていることが具体的に報告されている。

（４）　自立心について

①　観察結果から

異なる年齢の子どもたちが、強制によらず、自らの意思で主体的に、遊び、生活を共にする時、多様で重層的な相互交渉が生まれる。そのことによって、向社会性や愛情関係や受容性などの子どもの心の発達が促されている。さらに、それらの経験と発達が相俟って、子どもたちの自立が促されていると考える。

自立とは、自分を大切に思うと同時に、相手の人格をも尊重するという姿勢が前提である。その上で、良いことと悪いことを自分の責任で判断し、行動できるということであろう。

相手を尊重するということで、子どもは驚くべき態度をとっている。その１例として、次のエピソードをあげる。

［エピソード9］ 異年齢：設定保育場面（2～5歳児）

③　D君(2)は、隣のテーブルで、つばめ飛行機を熱心に折っている4歳児のE君の向かいに座る。D君はE君のやっているのを見ながら、「こうやるんでしょ。E」と自分が折ったのを見せると、E君は「ウン」と頷く。しかし、その次が分からなくなり、中途の紙をE君の方にスーッと押す。するとE君はそれを黙って取り、続きを折ってD君にあげる。

そこに3歳児のF君も加わり、E君に聞く。E君は、「ここの線のところ」などと言って、手を添えて教える。E君はF君のことをチラッ、チラッと見て、気にかけながら折っているが、困っているのを見ると「まんなか」と言って立ち、F君の側に行って片側だけ折り、「反対側はやってみ」と言って渡す。

Ｅ君（４）は、おせっかいはしない。聞かれたことには答えている。しかし、２歳児のＤ君には難しいと判断すると、黙って続きを折ってＤ君にあげた。ところが３歳児のＦ君には、その力量を見極めながら、手を添えて教えたり、見守ったり、困っているとまた難しいところだけに手を貸す。そして最後は、Ｆ君を尊重し、Ｆ君自らの手で完成するように促すという見事な伝承をした（ヴィゴツキーの「発達の最近接領域ＺＰＤ」概念による発達の道筋に通じている）。

②　実態調査から

実態調査の表 18 の「良い効果」の№1 と№2 にあるように、年上の子が下の子に慕われ頼られることで自覚を高め、年下の子は上の子に憧れ、見習い、何にでも挑戦していくという関係ができる。お互いにその関係を喜び、味わい、自立心を養っているという趣旨の報告が多数あった。異年齢保育に取り組んでいる保育士や関係者の実感であろう。

３　異年齢保育の取り組みの条件と課題

ａ　取り組みの条件

異年齢保育の取り組みの方法・形態によって、表 19（資料 P.21）のような様々な問題が生じてくる。実態調査の「反省点」という項目の中に、「形だけ異年齢保育を取り入れても、子供達の人間関係は深まらない」という報告がある。Ｃ保育園でも、取り組みの当初、行事の前や週１、２回程度設定保育の時間に 20～30 人位の規模で実施していたが、その時には、今のような、子どもたちの相互交渉の深まりは無かった。又、同じく「反省点」の中に、「保育士の思惑が強くなり、子供への押し付けになった。」という報告もある。このように、異年齢保育の取り組みが、子どもの発達にとって本当に実りのあるものになるためには、熟慮された条件・配慮が必要なのである。これについて、宮里（2006）は次のように指摘している。

「異年齢保育実践では、①年長児は思いやりと優しさが育ち年少児も年長に憧れ意欲的になるといわれるが、『お世話されたくない年少児』『自分たちだけで遊びたい年長児』などの部分もあり、世話を強制しないこと。②異年齢保育は異年齢だけでなく同年齢でも構成されているので、異年齢だけの活動にこだわりすぎないこと。③保育の焦点を何歳にあてるか課題となるが、保育者が年齢別に課題を分担するのではなく、子どもたちがお互いの違いに気づき分担する力を育てることが大切である。これまでの『教えて育てる』保育から、異年齢のかかわりを中心にした『生活を通して育てる』という発想への転換が求められる。」

ｂ　取り組みの課題

実践に当たっての課題については、実態調査の「課題」についての回答の中から、特に重要と思われる次の７点をあげ、整理する。

① 年齢幅で遊べる遊びの工夫の保障。
② 実践の評価・反省を踏まえ、見通しを持った計画作り。
③ 保育士を含む全ての職員間の共通認識の形成、情報交換、連絡。
④ 保育士のレベルアップのための研修と新任保育士への継承作業。
⑤ 子どもの現状に合った人的・物的環境構成。
⑥ 乳児を含めた異年齢保育の実践。
⑦ 保護者の理解・協力を得る取り組み。

⑥に関して、C 保育園では４年前より０～２歳の低月齢児においても異年齢保育に取り組んでいる。さらに 2008 年の秋から土曜日に０～５歳児までの異年齢保育を実践している。今まで以上に、豊かな相互交渉と人間関係の広がりが見られている。今後、平日においても乳児を含めた異年齢保育の可能性を探っているところである。

第２節　結論

１　異年齢保育と子どもの発達

以上の考察の結果、年齢別保育と比べて、異年齢保育は子どもたちの向社会性、愛情関係、受容性、自立心をより豊かに育んでいるとの結論に達した。さらに、本論の根底にある問題について以下深める。

２　年齢別保育と「競争の原理」

（１）　年齢別保育の根拠とその背景

これまでの考察の中で、異年齢保育との比較という相対的な視点からではあるが、その問題点が明らかになってきたように思われる。

一般に年齢別保育の根拠として、①法令に基づいて永年行われてきたこと。②「年齢が等質であるということから発達的に等質であるとみなされ、保育を行ううえで効果的であるとされてきた」こと、等があげられている。

この根拠は、学校教育における年齢別学級編成と同じ考え方である。国民皆学の義務教育制度が、各国で組織されて行ったのは、産業革命期からであるが、日本においては、1872（明治５）年の「学制」以降である。その背景には、日本近代化のスローガン「富国強兵」・「殖産興業」の政策があり、優秀な兵士と労働者をいかに効率的に大量に育成するかという時代の要請があった。この年齢別学級編成は、等質な集団に競争原理を働かせ、一斉･集団･画一的な教育を施すのに適したシステムだったと言えよう。

（２）　年齢別保育の本質とエートス

ａ　等質性と効率性

保育園においても、児童福祉施設最低基準によって、保育士配置の最低基準が定められており、それを基に事情のない限り何の疑問もなく年令別保育が永年実施されてきた。その実施に当たっては、各年齢の発達的な特徴をおさえ、同じ発達課題を効率的に達成するために画一的、一斉的な保育を展開するというのが、年齢別保育の本質と言える。

もちろん５,６歳ともなれば､仲間関係も生まれ､行事などで､仲間同士力を合わせ、助け合う機会が与えられることによって、協調的相互交渉も増し、また互いに刺激し合って発達を促すことにつながる。その点では効果を発揮してきたと言える。

ｂ　競争の原理と排他性

しかし、年齢別保育の本質からは必然的に競争関係が生じてくる。なぜなら、発達課題が、「できる、できない」の、目に見える形での達成度を求めることにつながり、

そのために子どもたちを賞賛したりして、そのプライドに訴えかけながらの保育になりやすいからである。その一端が観察結果にも現れている。次のエピソード 10 と 11 を紹介する。

［エピソード10］ 年齢別：設定保育場面（4歳児）

（保育室にて保育士の説明を聞き、子どもたちは、各自集中して発表会の劇のお面の製作にとりかかる。）

① 完成した子は、見せ合うことなく、次々と「センセー、できたー」と保育士に見せに行く。保育士は「ヤッター」と言ったり、拍手するなどしてほめる。

② 遅れているU君は泣き出し、袖で涙を拭き始める。

保育士は、「絵が描けない」と言うU君の手を持って一緒に顔の輪郭だけを描く。その後Eちゃんが「描いてやるかー」と言ってU君からマジックを取ろうとする。するとU君は、「いや！いや！自分で描くんだから！」と手で払いのける。再度、後からマジックを取ろうとするEちゃんに、「いや！いや！」とまた、その手を払いのける。

しかし、保育士が来て一緒に描いてくれた時はニコニコ嬉しそうにしている。最後にねずみのひげのみを自分で描き、保育士に「園長先生に似てるね～」と言われ喜んで笑う。切るのも保育士に手伝ってもらい、完成する。

子どもたちは、作成の場面でも相談し合うことなく製作に集中し、完成しても見せ合うことなく、われ先に保育士に見せに行った。保育士は、それぞれの子にオーバーなくらいにほめる。U君は、このような作業が苦手で、上手く進まず、周りの仲間が次々と完成する中、焦るばかりであり、悲しみがこみ上げてきた。しかし、仲間の援助は、U君のプライドが許さず（主任保育士談）拒否する。保育士の援助は喜んで受けた。

これに対し、異年齢保育における、同じ内容の設定保育場面のエピソードを次にあげ、比較したい。

［エピソード11］ 異年齢：設定保育場面（2～5歳児）

（異年齢選択活動（のびのび）の「たいけん」を選んだ2～5歳児 12 人が、保育室にて保育士の説明を聞き、発表会の劇のお面づくりをする。）

① 5歳児のHちゃんとIちゃん、4歳児のJちゃんは、何か話しながらニコやかに絵を描いている。最初に絵を描き上げた4歳児のK君は、ピョンピョン跳ねながらみんなに見せて歩く。

② 4歳児のLちゃんは、3歳児のTちゃんに絵を見せながら何か教えている。

２歳児のM君は、「先生、切れない」と保育士に助けを求めると、隣りのLちゃんが「L、切ってあげる」と言って切ってくれる。切ってもらった後、M君は「ここも切って」とまたLちゃんに頼み、L ちゃんは快く切ってくれ、M君は満足した様子。

Hちゃん(5)と4歳児のNちゃんは、紐も通して完成したお面を「見て、見て」と言ってみんなに見せて歩く。

Nちゃんは、同じ4歳児のOちゃんとお面を見せ合い、自分のお面の紐をDちゃんの首に掛けてあげ、2人とも満足そうにしている。

ほかの子どもたちも、同様に楽しくおしゃべりしながら、作ったり完成したものを見せ合ったりしている。

楽しそうに会話しながら作っている子たちもいるが、絵画や制作が好きなＫ君(４)は、集中して一番最初にお面を完成させた。Ｋ君は早さを競っていたわけではないので、一等賞をほめられに保育士に見せに行く必要はなかったようである。出来上がりに満足し、嬉しかったので、その喜びをみんなに伝えずにはおれず、ピョンピョン跳ねながらみんなに見せて歩いたのではないかと思われる（保育士談)。

他にも、年上の子が、年下の子に絵を見せながら教えたり、保育士に助けを求めた２歳児に対し、隣の４歳児が自ら援助したり、完成したお面を５歳児と４歳児が見せ合ったり、首に掛けてあげたり、みんなでお互いに見せ合ったりしている。

エピソード 15 と比較すると、その違いがよく分る。

競争自体は、お互いを刺激し合い、切磋琢磨することによって、技能や人格を向上させるために有用なものである。特に様々な面で飛躍的に成長する５,６歳の子どもたちの活動の保障は必要である。しかし、それが日常的になることは好ましくなく、必要以上に人間関係の緊張度（ストレス）を増すことになると思われる。そして、実際に、年齢別クラスは、子どもたちにとって、ホッと心休まる居場所となっていないようである。それを反証する説明として、実態調査の次の回答を紹介する。

［実態調査より］

「子どもの成長･発達についての良い効果」No.4「心の安定･癒し」①

・　年上の子で、特に同年齢の中では発達がゆっくりで、自信を持てない子や自己中心などで友だちと関わる力が弱い子や葛藤のある子が、年下の子に頼られることで、自信を持つようになったり、ありのままでいられたり、ほっとする居場所になっている。そのことを通して同年齢の仲間関係も良くなる。他者の強さ自分の弱さが見え易い(自由で居られる)。異年齢のグループ･行動が息抜き、気分転換になる。

（資料 P.18　4①）

同年齢のクラスは、子どもたちが「ありのままでいられたり、ほっとする居場所になって」いないと言えよう。

以上のように相互交渉の多様性を欠き、向社会性も乏しく、単調で内向きの集団となり、緊張度も高いとなると、内においてはトラブルが発生しやすいし、集団の外の者に対しては、排他的になりやすいと考えられる。

前掲の４歳児集団が２歳児１人を力で攻撃・排除した例の他に、次のようなエピソードがあった。

［エピソード12］ 年齢別：設定保育場面（5歳児）

（保育士より、前日休んだ子2名の課題（絵画）の他は、自由に遊んでよいこと、片付けられる量の遊具を出して遊ぶことが指示される。）

・ 絵画4、5人、紙ヒコーキ2人、お医者さんごっこ3～5人、トランプ4人の4グループができる。その他1人で絵を描く子などがいる。

・ 押入れの下に入っていじけているKちゃんに保育士から「中に入んないでね～、そこだめだよ」の注意がある。

その近くにいたIちゃんが保育士に大声で「A子とD男がL子のこと泣かした」と告げ口をする。

保育士は、「またー」。「そこ出て来てねー」。と注意を繰り返す。AちゃんがD君に耳打ちをすると、またIちゃんが保育士に「A子がD男をまたいじめてる。」と（嘘の）告げ口をする（初めIちゃんはD君と仲良くお医者さんごっこをしていた）。Aちゃん「なんもいじめてないしょ」と反論。Iちゃんは「いじめようとした」と返す。Aちゃんは「いじめようとなんかしてないしょ。」の言い合いがある。

そこへ押入れの中のKちゃんとAちゃんの言い争い（○△×）があり、Kちゃんは、保育士の所へ行き、背中におぶさり、「嫌いって言われた」と泣きながら訴える。Aちゃんは、「絶対嫌いなんて言ってないから」と返す。

保育士は、Kちゃんを連れて、AちゃんとD君の所へ行き、事情を聞く。2人とも「そんなこと言ってない」と言う。（「変な人」とは言ったらしく）保育士は2人に「自分も変な人って言われたらどう思う。よーく考えてごらん。Kちゃん、ちゃんとお話してね」と伝え、べったりくっついて離れないKちゃんの腰を押し、「ほれ、ほれ、」と話し合いを促し、その場を立つ。

その後、Kちゃんは、Aちゃん、D君の2人と保育士の間を行きつ、戻りつするが、最後まで解決せずに終わる。

保育士は、Ｉちゃんの最初の告げ口を聞いたとき、「またー」と反応している。日頃からこのような人間関係のトラブルが多いことを伺わせる。Ｉちゃんは、初め仲良く遊ん

でいたＤ君にＡちゃんが耳打ちをするのを見て、その２人の親密な雰囲気に焼き餅を焼いたのか、保育士に嘘の告げ口をした。これが一層問題をこじらせたように思われる。このトラブルはクラス保育の半分以上（約 30 分以上）延々と続いた。

このエピソードに関して、もう１つ問題を付け加えるとすれば、大きな画用紙に絵を描いていたグループの内の４人が、ほとんど同じ構図・色彩の絵を描いていた。等質性に関連してこれも参考になる。

このように年齢別保育における等質性と効率性という本質が、その子ども集団において、多様性・向社会性・受容性に乏しい、競争的で排他的な行為性向、エートス（ｅｔｈｏｓ）を形成しやすくしているといえよう。

今日のわが国における子どもの生育環境の変化、特に、少子化や核家族化や地域の異年齢子ども集団の消失という状況を考えると、年齢別保育の抱える問題性は、極めて深刻ではなかろうか。

３　異年齢保育と「共生の原理」及び今日的意義

（1）　異年齢保育と「共生の原理」

今日、国内でも、世界でも、経済的利益を最優先する競争原理や、多様性を認めず、異質なものを排除する非寛容の精神に被われているかのようである。

アルベルト・シュヴァツアーは「人類は皆きょうだい」と言った。C 保育園が１０数年前に異年齢保育の取り組みをスタートさせた時、「みんなきょうだい、大きな家族」をテーマとして取り上げた。

保育園は、異年齢の子どもたちが大人たちと一緒に朝から夕まで（延長保育をすれば１１～１２時間）生活している場所である。いわば昼間の大きな家庭であり、一昔前の多世代、多人数の家族の姿に似ている。そこには、葛藤も含め子どもたちが育ち合うのに適した条件が存在している。

そもそも子ども（人）は生まれながらにして、子ども（人）に強い関心を持っている。自分より小さくて弱い存在に対しては、自然にかわいがり、お世話したくなる。したがって、年齢の幅が大きければ、それはより強く出てくる。またさらに、年上の子どもたちや大人がお互いに協力して小さい子に関わる。このような関わりの中から、愛着行動だけでなく、養護的な関わりや協調的な関わりも多く出てくる。観察の中では次のような印象深いエピソードがあった。

［エピソード13］ 異年齢：生活場面　午睡（2～5歳児）

③　午睡中、いつも落ち着かない4歳児のＢ君である。同じファミリーの3歳児のＣちゃんが、保育士に「センセー、ネレナイ」と声を掛ける。保育士から「もうちょっと待ってネー」の返答がある。その隣に寝ていた3歳児のＤ君も、寝付けない様子。すると近くにいたＢ君が、2人の間に入って、先生役を引き受け、Ｃちゃんと Ｄ君の背中を軽くトントン叩いて寝かしつける。Ｃちゃんも Ｄ君も、素直に受け入れている。

保育士たちも同様に、子どもたちを寝かしつける。

このように異年齢生活集団では、保育士と子どもたちが、まるで子沢山の家族が、みんなで助け合って共に生きている姿に似ている。

前述したように、発達段階の異なる子どもたちが共に生活し、遊ぶことは、それ程簡単なことではない。したがって、心の葛藤も多いと思われるが、子どもたちは互いに学び合い、知恵と工夫を凝らして、それらを乗り越え成長していく（実態調査の表18「良い効果」の№5 の③〔危険回避〕に「ケンカ・トラブルが少ない」「かみつき、ひっかき等が激減した」との回答があった）。そしてまた、年上の子が年下の子をお世話するだけの関係ではなく、年下の子が年上の子を気づかったり、自己主張したり、対等に渡り合ったりする対等・平等の人間関係を築いている。その例として次のエピソードを紹介したい。

［エピソード14］ 異年齢：自由遊び場面 （2～5歳児）

・　乳児より最近移行してきた2歳児のM君を、4歳児のNちゃんが抱っこしたり、手をつないだりしながら連れて歩き、一緒に遊ぶ。

2人は最初、机上操作積木などを、1つのイスに座って一緒に遊ぶ。その後、カルタに移る。Nちゃんは、2、3歳児を相手に一人勝ちしている。M君は、その様子をジーッと見ている。Nちゃんと3歳児のOちゃんが同時に札を取り、もめる。Nちゃんは「N！」、Oちゃんは「O！」、Nちゃんは「ちがう！N！」と譲らず言い争う。そこへ、保育士が来て、「ぐちゃぐちゃになったよ」と声をかける。Nちゃんは「Nだもん……。もうやめる」と言ってその場を離れ、部屋の隅へ言ってうずくまる。M君も不安一杯の顔で後を追い、Nちゃんの顔を心配そうにのぞく。M君は、その後直ぐ保育士の所へ行き、何か話している。少し経って、Nちゃんは立ち上がる。それを見て、M君は直ぐNちゃんの下へ行き、Nちゃんも手を延べ、2人は、また手をつないで別の遊びを探しに歩き始め、途中でＮちゃんはＭくんをおぶる。

Ｎちゃん（4）は、負けん気の強い女の子である。それに比べると、Ｏちゃん（3）は普段は大人しい女の子だが、この時ばかりは、ようやく取れたカルタを手放したく

はなかったようで、年上のNちゃんと対等に渡り合い、芯の強さを見せつけた。Nちゃんは自分の思い通りにならず、すねてしまった。Nちゃんにかわいがられ、行動を共にしていたM君（２）は、Nお姉ちゃんのことが心配でたまらない様子。なんとか救いの手を差し伸べたいと思ったのか、保育士に助けを求めに行ったようである。Nちゃんは、その様子に何かを感じ取ったに違いない。自分で気持ちを落ち着かせ、立ち上がった。M君は、ホッと安心してNちゃんの下に行き、Nちゃんはまた M君の手を取った。

年下の子の自己主張で、年上の子との対等な関係が出現し、年下の子が年上の子を思う気持ち（愛情）が年上の子の気持ちを励まし、立ち直らせたと捉えることができよう。

このように、生活を共にする異年齢保育では、人と人とが互いの人格を尊重し合い助け合って共に生きる、共生的な生き方を自然と身に付けていっているのではなかろうか。

全体考察及び結論の１では、異年齢保育を通して、子どもの成長・発達を促していると思われる特徴的な傾向を４つに整理したが、これらは個々に独立したものではなく、互いに関連し、高め合っているものと考えられる。「共生性」の原理は、それらが集約された一つ次元の高い概念であり、異年齢保育の中で形成されている「エートス」として捉えて良いものと考える。

（２）　異年齢保育の今日的意義

本論文の冒頭で述べたように、今日のわが国には、子ども・青年の全人格的発達が阻害されていると言ってよい危機的な状況がある。例えば、自己中心的で、他人と喜びを共にしたり、他人の痛みを感じ取ったりする共感能力が乏しい。またコミュニケーション能力が低く、耐性もないため、すぐキレる。葛藤を乗り越えて親密な人間関係を築けない等々である。それらが深刻な教育問題や社会問題を引き起こしている。特に学校で起きているいじめや自殺の問題は、年齢別学級における競争原理の働きからくる、等質的で多様性を認めず、異質なものを排除するという性向に起因していると考えられる。この問題は、本研究において明らかとなった年齢別保育の本質とエートスからくる問題性と同根であると言ってもよい。そして、それはまた凶悪犯罪の低年齢化や、青年のひきこもりや無差別殺人事件、さらには日本社会全体の養育性形成不全の問題などとも無関係ではないと思われる。本研究で明らかになった、異年齢保育の取り組みにおける子どもの発達は、これらの深刻な問題の原因を根本的に考え、解決に向けた道筋の一つとして重要な示唆を我々に与えているのではなかろうか。

すなわち前節で考察したように、異年齢保育の中では子どもたちは多様で重層的な人間関係の中で豊かな向社会性、愛情関係、受容性、自立心を育んでいる。

言い換えるなら、異年齢保育の中で形成されている「共生性」というエートスの働きが、人間社会の中で、自分も他者をも大切にし、自己の責任において　善悪を判断し、行動できる、「真の意味での自立した人格の形成」を促すことに資すると言えるのではなかろうか。このことは、（１）で述べた、わが国や世界で起きている問題を考える上でも意義深いと思われる。以上、異年齢保育の今日的意義について総括して論じた。

今後の課題

本研究の特色は、これまでの異年齢保育に関する研究では扱われてこなかった、次の３点にある。

第一点は、年齢別保育と異年齢保育双方における保育士を含めた子どもたちの相互交渉パターンの特徴の違いを、観察によって実証的に比較・分析・考察し、そのことを通して、年齢別保育の本質と問題点を明らかにしようと試みた点である。第二点は、より多くの保育現場における子どもたちの生の姿や保育士たちの生の声を反映するための実態調査をしたことである。そして第三点として、第一点目の観察を縦糸とし、第二点目の実態調査を横糸として、異年齢保育の本質に迫ろうと試みた点である。

今後の筆者の研究課題としては、本研究の結論の妥当性の検証をさらに進めるとともに、長期的視野に立った研究、例えば、０歳～６歳までの成長・発達過程や卒園後の成長・発達過程の追跡調査などが考えられる。

本論文で述べたものは、あくまでも最初に述べた仮説に基づくものであり、一実践者の拙い研究である。研究者や実践者の皆さんのご批判・ご指摘をいただきたい。今後も他の研究者による異年齢保育についての研究の進展により、さらに子どもたちの全人格的な成長・発達が保障されることを祈りたい。

［謝辞］

本研究を進めるに当たっては、終始、陳省仁教授の貴重な示唆と懇切なるご指導をいただきました。特に、先生の学生に対する愛情、学問研究に対する情熱と真摯な姿勢に感銘を受けながら学び、曲がりなりにも研究を進めることができたことを、大変幸せに思います。心より感謝申し上げます。

また、実践者が研究することの意義を認め、応援してくださった佐藤公治教授はじめ関係の諸先生方、及び甲斐仁子藤女子大学教授、並びに乳幼児発達論研究グループの仲間の皆さんに、心よりお礼申し上げます。

さらに、C保育園の異年齢保育の実践に当たって、多大のご教示をいただいた故土山忠子大阪薫英女子短期大学名誉教授に深く感謝いたします。

最後に、観察の場を提供し、協力してくださったA保育園及びB保育園の園長並びに職員の皆様、本研究に真先に理解を示し、ご支援くださったC保育園の（社福）法人の齊藤理事長はじめ役員の皆様、そして、本研究の共同研究者とも言うべきC保育園の職員の方々や、その他多くの協力者の皆様、とりわけ子どもたち一人ひとりに心より感謝いたします。ありがとうございました。

［研究協力者氏名］

阿部　政代	楢木久美子	堀　やす子	早坂　菜未
高坂　優子	冨樫　幸恵	武田伊津美	工藤このみ
三浦　静香	武蔵　尚子	二階堂美保	大澤　景子
柳生　好輝	中里　由美	平河　奈美	家村　維人
廻　麻央	寺門　貴紀	谷内　美郷	竹内　朝希
松田眞優美	鵜飼　悦子	因幡　敦子	見越　桜
滝　和代	小川由紀子	石井　裕子	佐藤　京子
神田　義保	秋田谷昭子	千葉　律子	

〈用語解説〉

「異年齢保育」

３歳・４歳・５歳など異なった年齢の子どもたちでクラスを構成する保育形態を表す用語。同年齢でクラスを構成する年齢別保育（横割り）に対して、縦割り保育ともいう。同年齢クラス構成を基礎に異年齢での交流を図る異年齢交流保育を含むこともあり、混合保育という場合もある。少子化できょうだいや地域の異年齢集団のあそび仲間が少なくなったことが背景とされる。また、保育所入所児の年齢構成が３歳以上児は減少し、３才未満児が増加していることから、３歳以上児の異年齢保育が大きな課題となっている。同年齢でのクラス編成が可能でも異年齢で保育する理想的異年齢保育と、過疎地などの小規模園での同年齢でクラス編成が不可能な条件的異年齢保育とに分けることができる。　　宮里六郎(2006)「異年齢保育」保育小辞典編集委員会続編　宍戸健夫・金田利子・茂木俊彦監修「保育小辞典」大月書店, P. 16～P. 17

「向社会的行動」（prosocial behavior）

向社会的行動とは、外的な報酬を期待することなく、自発的に他者を助けようとしたり、他者のためになることをしようとする行動を指していう。思いやりなどはその代表的なもので、忘れ物をした友だちに自分のものを貸してあげたり、けがをした友だちを助けようとしたり、泣いている子どもをなぐさめたりする、などがその範ちゅうに入る。向社会的行動は、共感性や役割取得（他者の視点に立てること）、道徳判断の発達と関連している。共感性があり、他者を信頼し、異なる見方を受け入れられることが、向社会的行動には必要である。また相手の立場に立ち、相手が何を必要としているのかについての判断がなされなければならない。幼少期によい愛着関係が形成され、安全基地をもてた子どもは、他者を信頼し、異なる見方を受けいれることが可能である。そこから、他者に対して何かしてあげたいとする気持が芽生えるのである。こうした幼少期の基本的信頼があってこそ、向社会的行動が発達するのである。　　刑部育子（2004）「向社会的行動」森上史朗・柏女霊峰 編『保育用語辞典第３版』ミネルヴァ書房，P.284

「エートス」（ｅｔｈｏｓギリシャ）

①人間の持続的な性格の面を意味する語。②ある民族や社会集団にゆきわたっている道徳的な習慣・雰囲気。『広辞苑』第四版（1991）新村出編、岩波書店。①アリストテレス倫理学で慣習的･持続的な性状を意味し､行為の習慣によって獲得した資質をいう。②一般にある民族や社会集団における慣習、習俗、道徳。　　『国語大辞典言泉』第一版（1986）林大編、小学館、その他厚東洋輔（1984）『平凡社大百科事典』２，Ｐ.600にも詳しい。

〈引用文献〉

荒井洌・小林幹夫編著（1987）「たてわり保育と活動ステイション」川島書店

加藤繁美（2006）「年齢別保育」保育小辞典編集委員会編　宍戸健夫・金時藤利子・茂木俊彦監修「保育小辞典」大月書店,P. 253

宮里六郎(2001)「異年齢保育実践の課題と『保育計画』づくり」『季刊保育問題研究』190, P. 86～P. 101

宮里六郎(2006)「異年齢保育」保育小辞典編集委員会続編　宍戸健夫・金田利子・茂木俊彦監修「保育小辞典」大月書店, P. 16～P. 17

文部省(1979)「幼稚園教育百年史」P. 288

日本保育学会著(1968)「日本幼児保育史」第二巻　フレーベル館, P. 295

(社福)日本保育協会(1998)「保育所の保育内容の実態に関する調査研究報告書」

嶋さな江(1999)「自然な関係を大事にし、保育の裾野の生活を豊かにーしかたなくする異年齢保育から，豊かな人間関係を生み出す保育形態として」現代と保育編集部編「異年齢保育」ひとなる書房, P. 10～P. 12

田代和美(2004)「年齢別保育」森上史朗・柏女霊峰編「保育用語辞典　第３版」ミネルヴァ書房, P. 110

東京都公立保育園研究会(1980)「別冊公報」P. 2～P. 6

陳省仁(2007)「現代日本の若者の養育性形成と学校教育」『北海道大学大学院教育学研究科子ども発達臨床研究』創刊号, P. 19～P. 26

渡邊保博(2006)「異年齢保育の回顧と展望」『季刊保育問題研究』219, P. 6～P. 15

〈参考文献〉

参考文献については、今後の研究の便宜を考え、年代順に列記する。

東京都公立保育園研究会(1980)「別冊公報」P. 2～P. 6

今井弘雄(1984)「２～５歳　異年齢児・タテ割集団ゲーム集」黎明書房

荒井洌・小林幹夫編著(1987)「たてわり保育と活動ステイション」川島書店

穴井順子(1995)「家庭教育の補完を目的とする保育の日独比較」『東洋英和女学院短大』33, P. 36～P. 52

(社福)日本保育協会(1998)「保育所の保育内容の実態に関する調査研究報告書」

金澤妙子(1998)「異年齢のかかわりに関する一考察」『県立新潟女子短期大学研究紀要』35, P. 55～P. 63

松浦敬子・中村慶子・木戸弥生・堀越美貴・須田瑞穂・中原正博(1999)「異年齢児クラスにおける遊び活動の援助に関する研究－楽しい遊びを通じて３・４歳児の関わ

りを深め信頼し合う気持ちを育てるにはー」『広島女子大学子ども文化研究センター』4, P. 81～P. 95
嶋さな江(1999)「自然な関係を大事にし、保育の裾野の生活を豊かにーしかたなくする異年齢保育から，豊かな人間関係を生み出す保育形態として」現代と保育編集部編「異年齢保育」ひとなる書房, P. 10～P. 12
藤森平司(2000)「たてわりではない異年齢児保育 21 世紀型保育のススメ」世界文化社
羽根田真弓(2000)「幼稚園教育に関する一考察－ドイツの幼稚園が示唆するものー」『鳥取女子短期大学研究紀要』42, P. 49～P. 58
越中康治・中村多見・前田健一(2003)「異年齢集団における幼児の社会的適応－月齢，語彙，社会行動特徴，攻撃タイプー」『広島大学心理学研究室』3, P. 137～P. 145
橋本三枝子(2001)「幼稚園での延長保育のあり方，現状と課題～異年齢保育の良さを生かした延長保育に取り組んで～」『季刊保育問題研究』188, P. 255～P. 259
青木倫子・風間節子・長谷川孝子・坂口やちよ・降籏美佳子・立浪澄子(2001)「伝播していく遊びの中にカリキュラムを探る～『お店屋さんごっこ』の展開と異年齢への活動の広がりを通して～」『季刊保育問題研究』190, P. 8～P. 17
宮里六郎(2001)「異年齢保育実践の課題と『保育計画』づくり」『季刊保育問題研究』190, P. 86～P. 101
高橋美恵子・藤戸純子編著(2002)『コミュニケーションの力を育てる異年齢保育』エイデル研究所
仲野悦子・後藤永子(2002)「異年齢児とのかかわりーいたわりと思いやりの心の育ちー」『保育学研究』40(2), P. 72～P. 80
今井弘雄(2002)『２～５歳　異年齢児・タテ割集団ゲーム集』(新装版)黎明書房
今井裕子・生田貞子(2002)「縦割り保育に関する事例研究」『富山大学教育実践総合センター紀要』3, P. 25～P. 32
入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子(2003)「異年齢交流を支えるティーム保育の検討－指導計画の変容を手がかりとしてー」『鎌倉女子大学紀要』10, P. 1～P. 9
荒井洌・福岡貞子編著(2003)「異年齢児の保育カリキュラム～たてわり保育の指導計画と実践例～」ひかりのくに
山本朋子(2003)「二・三歳児混合クラスで過す二歳児達」『季刊保育問題研究』199, P. 116～P. 119
伊藤美佳(2004)「異年齢の中で育ってきたＴ君～本音でぶつかりあい認めてもらう中

で気持ちを切り替える～」『季刊保育問題研究』205, P. 13～P. 21
藤岡教子(2004)「ペアーづくりから始めてみて…～異年齢での集団づくり～」『季刊保育問題研究』206, P. 110～P. 114
井上一世(2004)「子どもの主体性を育む環境づくり～たてわりコーナー保育を通して～」『保育の友』52(2), P. 19～P. 22
藤野友紀・成田美貴・世古由美・宮串尚江(2004)「保育における劇遊び導入の発達的意義－北大幼児園４，５歳児異年齢混合保育の実践記録をもとに－」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』93, P. 53～P. 79
伊藤シゲ子(2005)「異年齢保育の四季～生活をともにする異年齢集団の保育づくり～」『季刊保育問題研究』212, P. 211～P. 214
山城明代・玉城真友美(2005)「各地の保育実践研究　ひびき合い，育ち合い－異年齢交流保育から」『季刊保育問題研究』214, P. 02～P. 109
坪井敏純・山口郁(2005)「異年齢保育の中の子どもたち」『鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究報』21, P. 1～P. 10
脇信明ら(2005)「異年齢保育における子どもの発達に関する考察－ひめやま幼稚園における実践をもとに－」『別府溝部学園短期大学紀要』25, P. 17～P. 24
荒井洌(2005)「異年齢でのおつきあい－アイデンティティーを培うために」『ファミリー・サポートの保育園～家庭と園とが手をたずさえて～』明治図書, P. 94～P. 101
宮里六郎(2006)「異年齢保育」保育小辞典編集委員会続編　宍戸健夫・金田利子・茂木俊彦監修「保育小辞典」大月書店, P. 16～P. 17
笹部奈緒美(2006)「幼稚園における縦割り保育の取り入れ方に関する研究」(岡山大学教育学部 18 年度卒論)
横松友義・安達保雄・伊勢慎・永原慎太郎(2006)「異年齢保育に関する体系的研究の重要性」『岡山大学教育学部研究集録』132, P. 69～P. 76
諏訪きぬ(2006)「異年齢保育の今日的意義」『ききょう保育園の異年齢保育』新読書社, P. 126～P. 142
石田准一・今井啓予(2006)「子どもの関わり合いから育む保育」『立正社会福祉研究』7－2, P. 93～P. 96
渡邊のゆり(2006)「乳児を含んだたてわり保育」『日本保育学会第 59 回大会発表論文集』P. 332
渡邊保博(2006)「異年齢保育の回顧と展望」『季刊保育問題研究』219, P. 6～P. 15
高田清(2006)「異年齢保育という方法技術と仲間づくり」『季刊保育問題研究』P. 81～P. 89

伊藤佳世子(2006)「『毎日一緒』の積み重ねの中で」『季刊保育問題研究』219, P. 16～P. 27
堤崎栄造(2006)「飼育活動から見えてきたこと」『季刊保育問題研究』219, P. 28～P. 39
伊藤シゲ子(2006)「人との関わりを豊かに広げるために 生活をともにする異年齢保育に取り組んで」『季刊保育問題研究』219, P. 40～P. 52
粟津英子(2006)「年齢と発達を大切にした保育～障害児保育を通して学んだこと」『季刊保育問題研究』219, P. 53～P. 60
山中澄子(2006)「異年齢保育～無認可保育所(ひまわり共同保育所)の場合」『季刊保育問題研究』219, P. 61～P. 68
伊藤亮子(2006)「きょうだい･グループ保育への転換とそのための園舎づくり」『季刊保育問題研究』219, P. 69～P. 80
夏堀睦(2007)「正統的周辺参加論の視点による異年齢保育の効用」『富士常葉大学研究紀要』7, P. 171～P. 184
松永恵美・郷式徹(2008)「幼児の『心の理論』の発達に対するきょうだいおよび異年齢保育の影響」『発達心理学研究』19(3), P. 316～P. 327